セイバーアート・オンライン～物語の結末は…俺が決める！

レイドモンド

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて空に浮かぶ一つの城に炎の力を持つ剣士がいた……

幼いころに両親を亡くした少年神山飛羽真は兄である神山闇真ともに暮らしていた。

そんなある日、飛羽真は兄と共にＶＲＭＭＯ「ソードアート・オンライン」当選した。

そして飛羽真はＳＡＯの世界に入りその世界を楽しんでいた。

だが突如としていつもの日常が終わりを迎える

遊びだと思っていたものが現実になる。

そんな世界で飛羽真は否トーマは一つの剣と本に出会う

これは炎の聖剣に選ばれし少年とその仲間たちが繰り広げるかつてない物語……

目　次

初まり　1

初まり

プロローグ

彼の名前は神山飛羽真

小説家を目指す中学3年生の少年だ
彼を一言でいううなら文武両道という印象を持つだろう
全国模試第5位という秀才であり
居合四段という記録を持っている
だがそんな彼の生い立ちは悲しいものであった。

神山飛羽真は生まれて数日後に母を亡くした
そのため飛羽真は父である神山聖炎によって育てられた。
聖炎は不器用な父親であった
また聖炎は妻を失ったからか子供との接し方がうまくできなかった
そのため飛羽真は幼いころから甘やかされることは少なかったため

あまり感情を表に出さなくなった。
ただ飛羽真は兄である閻真には自分の感情を伝えることができた
そんな家族だったが一つだけ仲が良い時があった。
それは本を父親に読んでもらっている時であった。
飛羽真は本を聞くときだけは感情が表に出ていた。
そしてこの頃飛羽真は本の世界に入り込んでいった。

飛羽真が小学生になったころ周りの人間は
飛羽真をあまり好ましく思っていなかった
本ばかり読んでいる癖に成績は優秀
運動もできるそんな飛羽真を嫌いだったみたいだった。
人間という生物は自分よりも優秀な生物をねたむ性質を持っているから
こそこのようなことが起こってしまった。

初めはちょっとしたいたずらや悪口だったが
次第にエスカレートしていき最終的には
ものを隠すや集団リンチなどのイジメへと発展していった。
心境の変化を読み取った闇真が飛羽真のクラスの担任にいじめの可能性を訴えたが
聞き入れてもらえなかった大人という生物は子供をときどき甘く見る生物だ
聖炎もＰＴＡなどに問いかけたがいつも曖昧な返事ばかりだった。
だが教師がそう思うのは無理もないまだ小学１年生の子供がいじめなんてしないと
思ったからだ。
聖炎もＰＴＡなどに問いかけたがいつも曖昧な返事ばかりだった。

幸い別の教師に体にできた傷跡が見つかり飛羽真へのいじめが発覚した
それは２年も過ぎた頃だった
そのようなことがありいじめを受けていた２年間のせいであってか

飛羽真は一時的に人間不信になりかけた
だがそんな飛羽真を救ったある少年がいるのだが……
その話は物語とかかわるからまた別としよう
その後飛羽真は父親の手よって横浜から東京へ引っ越した。
環境が変わり最初離れなかったが次第に慣れていき友人もできた飛羽真
中学も普通な友好関係を結び日々の日常を過ごしていく飛羽真だったが
２年前悲劇が起きた父親の突然の死原因は事故死だった。
その後親戚の手によって遺産が分けられ
最終的に飛羽真たちに残ったのは遺産２００万円と小さな本屋だった。
そして今現在飛羽真たちは残った小さな本屋
ファンタスティック本屋『神山』で二人で暮らしている。
これが今までの彼の生い立ちだ。

２０２２年１１月６日午前９；００分
店の前で少年が本を開くそこには始まりという文字が書いていた。
そして店の看板を表に向けＯＰＥＮという文字が太く書いてある。

「よし！、今日も一日頑張りますか！」
この少年こそ本作の主人公　神山飛羽真　１５歳
「おい、飛羽真！終わったなら手伝ってくれ！」
そして少年を呼ぶ青年は神山閻真、飛羽真とは年が三つ離れた兄だ
「うん、今いくよ！」
そして今日も彼らの普通の一日が始まる

そして時間が過ぎていき１１：００頃

「そういえば兄さん、あれ届いたっけ？」
そう飛羽真が尋ねると待ってました！とばかりにいい笑顔で
「ああ　届いたぞ」
と答えた
彼らが言うあれとはＶＲＭＭＯ「ソードアート・オンライン」と〈ナーヴギア〉である。
なぜ手に入れれたかというとラストワン賞で当選したらしい
「楽しみだな～ソードアート・オンラインいったいどんな世界なんだろうな？」
「飛羽真は昨日からずっとそのことばかり話しているなログインできるのは
後２時間後だというのに」
「だって楽しみでなんだよ！小説の世界に入るこむみたいでさ！」
「ハハハ！飛羽真は相変わらず小説好きだな」
「まあ、なんていったて夢は小説家だからな」
そんな風な他愛もない会話をしていると時間が過ぎていった。

そして正午１２：００過ぎる前
飛羽真はナーヴギアをかぶりながらベッドに寝転んでいたがだが興奮している
そして時間になるとナーヴギアのコードをつなぎもう一方にルーターをつなぐ
そして安全ベルトを締め寝ころんだ。
飛羽真はこれから行く仮想世界に様々なことを思っていた
長年夢に見てた小説のような世界そんな世界に行ける
そんな思いを心にとどめて世界へのカギとなる魔法の言葉を発した
「リンク・スタート」

そう言うと同時に飛羽真の意識は仮想世界へと飛んだ。

だがそれは悪夢の始まりだった。

d

t o b e e n